

ビバハウス創設 10 周年・ビバハウス便り号外（その 2）

2010 年 9 月 20 日

10 周年号外（その 1）では、ビバの若者たちにとって一番有難い、お米をはじめとする食料を継続的にお送り下さる方々への感謝に触れないわけにはいかなかった。だがこのお米の支援は、実は今日も福井県からと兵庫県からの数 10 キロで引き継がれている。福井県からの宅急便の中には、うれしいことにかけてビバにいた青年からのお手紙までが入っていた。「僕は今共同作業所へも毎日通い元気で順調な日々です。今年も農作業を手伝い、お米を精米し、送らせて貰いました。みんなでおいしく頂いて下さい」と書いてあった。

この若者は、県立高校時代数学の成績が素晴らしく、ぜひ京大を目指すべきだとの勧めで、河合塾にも通い集中的に勉強に励んだが、過度な努力がたたりに、勉強を続けられなくなってしまった。精神と肉体の回復をじっくりと待ったが、なかなか根気が続かないということで、ビバにやってきた。

毎朝他の若者とグループワークの農作業のため、車で農場へ向かうが、ビバを出て 3 分もしないうちにいびきをかき始めてしまう。ある年のクリスマスの行事で、札幌の北星学園女子短大のダンスサークルの皆さんのお誘いを頂き、「くるみ割り人形」の素敵なダンスの鑑賞にビバ全員でいったが、これも幕があくや否や、いびきが聞こえてきた。周りの皆さんも一斉に振り向いたが、無関係。隣の席の若者も、必死に肩を揺すったが、その時だけ目を開けるだけ。

ビバに帰ってから、真剣に検討し、小樽市の総合病院で診察を受けた。「何らかの睡眠障害」があるのでしょうか以外の専門的診断は受けられなかった。これからが、ビバの本当の実力を発揮するときだった。インターネット引きこもり暦 10 年と自称する福岡県からの若者の助けを借り、インターネットで徹底的に「睡眠障害」を検索した。「睡眠時に呼吸が困難になるため、朝起きてからすぐに睡眠せざるを得ない病状で、睡眠時に、酸素マスクなどで酸素を補給すれば改善される」病気であることも分かった。

さらに全国の専門的治療機関として京大病院があった。若者の自宅の福井からは 30 分で通院できる。直ちに自宅に帰り、専門の治療を受けることにした。この結果が、ビバへの数 10 キロの福井の新米となったのだ。お礼の電話でのお母さんの声は弾んでいた。「今年は今までで一番でした。（ビバ 気候が暑かったので豊作だったのですか？） 違います、今までで一番息子が頑張ってお手伝いしてくれたのです。それもこれも、すべてビバの先生方のお陰です。息子はいつかお金をためてビバの先生方にお会いするために行きたいといつも言っています。」一人の若者の人生の再生に立ち会えた幸せを今再びしみじみと味わっている。